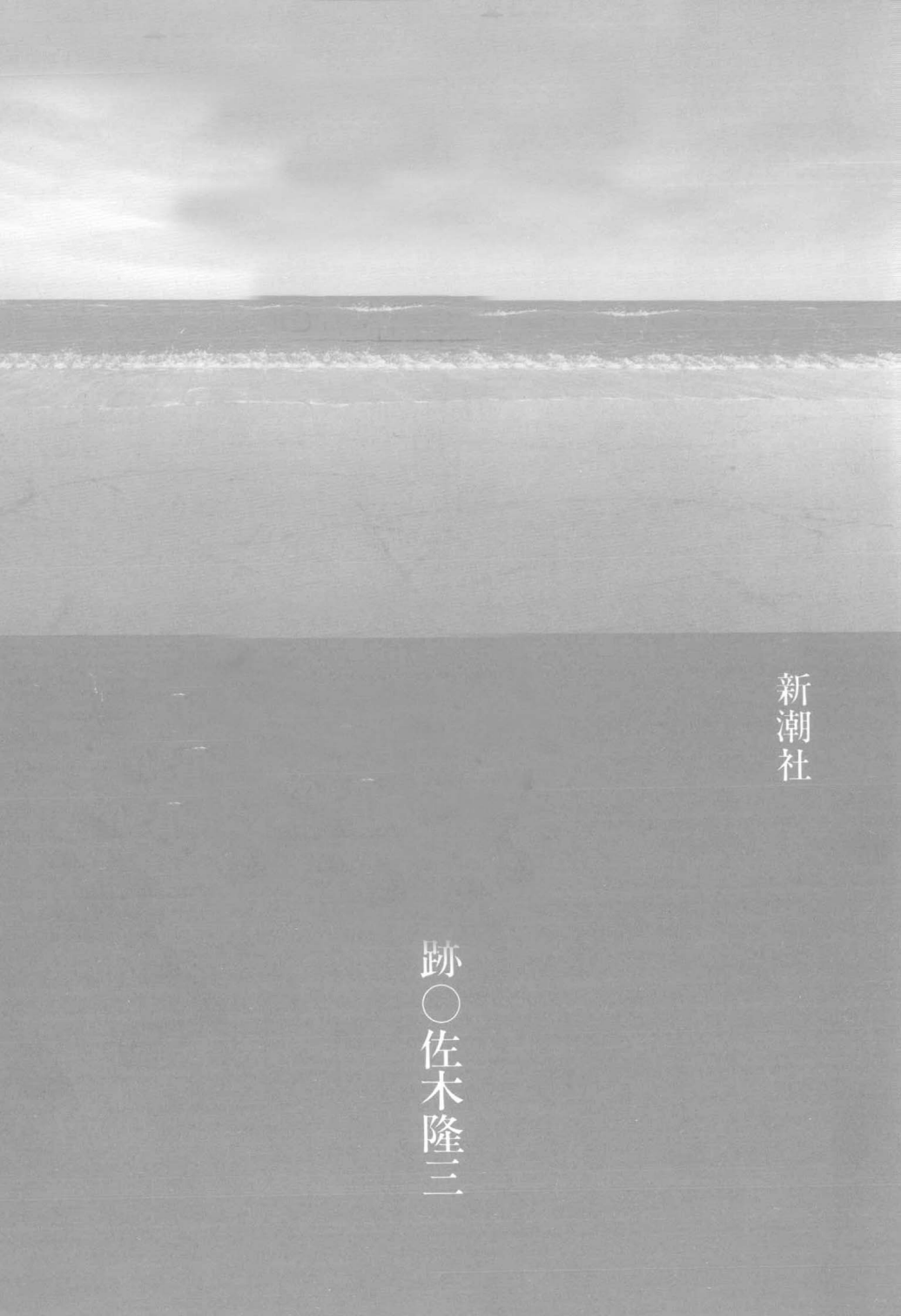


海燕ジョーの奇跡

佐木隆三



新潮社

跡○佐木隆三

海燕ジヨ一の奇跡

定価九八〇円



印刷	昭和五十五年二月十日
発行	昭和五十五年二月十五日
著者	佐木隆三（さきりゅうぞう）
発行者	佐藤亮一
印刷所	二光印刷株式会社
製本所	大口製本株式会社

発行所

郵便番号一六二／振替東京四一八〇八
 東京都新宿区矢来町七十一番地
 電話 業務部（番）五一二／編集部（番）五四二一
 株式会社 新潮社

© Ryuzo Saki, 1980, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信保宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

この大胆な海燕は、怒りに咆えたける海の上を、稻妻をぬって誇らかに飛びかけている。そして勝利の予言者はさけんでいる。

——嵐よ、さらにはげしく鳴りわたれ！

(ゴーリキー「海燕の歌」から)

海燕ジョーの奇跡

第一章

ジョーが、シャワーを浴びたあと、ビールを飲んでいたら、ドアをノックする音がした。二つ叩いて、次に三つ——。約束どおりの合図だったが、念のためにベッドルームへ行き、枕の下でピストルを取った。38口径 S & W 回転弾倉式である。

バスタオルを、腰にまいただけだった。ズボンをはいたほうがいいのだろうが、外に待たせるのはよくない。ジョーは、撃鉄を起し、後ろ手に持った。このアパートへ移ったのが一月前の九月末、あえてコザ市にしたのは、充分に考えたうえのことだが、部屋が一階なのは気になる。しかし、窓には鉄柵があり、ドアも鉄製の。

「寛敏か？」

「そうだよ」

レンズのはまった、覗き穴から見ると、落着かぬ様子で、与那城寛敏が足踏みしている。通りに、人の気配はない。

「よし」

ジョーは、安全鎖をはずして、ドアを開けた。するとジャンパー姿の幼馴染は、飛び込んで来

るなり、息をはずませて言った。

「ウラッコが、停っておったぞ」

「それより、おまえの車は？」

「だいじょうぶ、市役所の横へ置いた」

市役所からここまで、およそ二百メートル、駐車させてすぐ、駆けて来たのだろう。すっかり蒼ざめた顔面から、汗が噴き出している。

「拭けよ」

腰のタオルをはずして、投げてやった。そして念のために、もういちど、覗き穴から表を見た。大男の白人兵が一人、ふらふらと、こっちへ歩いて来る。二階の角部屋に、三十女を囲っている軍曹である。

「心配ないよ、尾行されておらんさ」

ちよつと不満気に、寛敏が言った。ジョーは、急いで問うた。

「ウラッコは、どこにあった」

「那覇の『沖縄エデン』の前によ」

「確かだな」

「まちがいないよ、ウラッコさ」

「そうか」

ランボルギーニ・ウラッコは、V型8気筒ミッドエンジンで、排気量が二九九六cc、二百六十馬力あって、最高速度が二百五十キロ。金城成光は、この春に、千三百五十万円で買った。水色の、あのスーパーカーが、沖縄に何台もあるはずはない。それに寛敏は、中学生の頃から、自動車の話になると夢中で、モデルに詳しいのだ。琉球連合理事長が、『沖縄エデン』に居るのは、まず間違いないだろう。

「よくやったな、寛敏」

丸裸で、ピストルだけを持って、ジョーは、冷蔵庫からビールを出した。

「飲めよ」

「うん」

さっきの栓抜きは、どこへやったか。ジョーが目でさがしているあいだに、寛敏はもどかしげに歯で開けて、瓶に口をつけて飲みはじめた。小瓶なので、一息で飲んでしまいうつもりらしい。あの日いい、瘦せぎすな寛敏が、さらに細くなったような気がする。咽喉仏などすっかり飛び出して、ジョーは見ているのがつらかった。

その寛敏の目が、ジョーの股間に、向けられている。どちらが先だったか、自慰をおぼえてからは、互いに回数など知らせ合い、こすり合ったりした仲だ。いまさら隠すこともないが、ジョーは体の向きを変えた。一カ月ほど前に、島袋一家の八人が琉球連合の行動隊に捕まり、本部事務所へ拉致されて拷問を受けたとき、寛敏はベンチで亀頭をはさまれたのだ。どんなに痛かったか、口惜しかったか。想像するだけで、ジョーの体はふるえる。

「急がんといいかな」

たちまち乾いてしまった咽喉を潤すために、飲みかけのビールを流しこんだ。テーブルの腕時計を確認すると、九時二十五分だった。

「どうする、ジョー？」

「……」

答えずにベッドルームへ行き、ブリーフをはいた。ダブルベッド脇の、大きな洋服入れには、スーツが三着だけ。ちよつと考えて、ジョーは、白っぽいのを選んだ。

「ジョー？」

寛敏が来て、ふたたび問う。だが黙って、カラーシャツを着ると、エンジ色のネクタイを結ん

だ。似合うか、似合わないか、陽子と別れて暮している今は、聞くことができない。

「そうだ、寛敏よ」

上着に袖をおしながら、ジョーは、洋服入れのほうへ、顎をしゃくった。

「その黒いの、ワイシャツといっしょに、紙袋へ入れといてくれ」

「分った」

「ネクタイは……白いのがいい」

「はい」

同じ二十五歳ながら、寛敏はまだ、琉球連合からバッジをもらっておらず、警察のいう準構成員なのだ。だからキャリア五年で、中堅会への出席を義務づけられているジョーに対しては、敬語になることがある。

ベッドの下に突っこんでいる、封筒の中には、一万円札が二十五枚ある。ジョーは、上着のポケットに入れる前に、三枚だけ抜き出して、枕の上に置いた。

「今月分を、やっぱり、置いとかなといかんだろう」

「……」

目をしばたたきながら、寛敏が頷いた。この部屋へは、ふたたび帰らぬ覚悟なのが、分ったのだらう。

1LDKのアパートは、外人向けだから、家具はすべて備え付けである。ジョーが空部屋を見に来たとき、管理人が英語で話しかけたのは、褐色の肌のせいだろう。隠れ家を求めているのだし、G Iが軍属になりすませば好都合だが、英語はカタコト程度なのだ。だからジョーは、嘉手^{かて}納空軍基地に入りする、P X関係の従業員だと言っておいた。

「ウラッコのほかに、何台くらい居たか？」

「ビュイック・リーガルと、シボレー・モンテカルロだった。青いシボレーは、どっかで見たこ

とがあるんだが、どうしても思い出せないさ」
「そうか……」

いずれにしても、ウラッコをふくめて三台で、行動していると思ってい。するとキャバレーに居るのは、十人前後だろう。

ジョーは、洋服入れの内扉にはめこんである鏡を覗きこんで、ネクタイの結び目を確めた。手榴弾も隠してあるし、いざとなったら、短機関銃サブマシンガンを使う方法もある。しかし、これから武器係の与那嶺のところへ寄っていたのでは、理事長たちがキャバレー『沖繩エデン』から出て行ってしまうだろう。やはり38口径ひとつで狙うべきだ。仮に手榴弾で、理事長を仕止めることができて、何人ものまきぞえを出したのでは、屁っぴり腰を笑われる。

「行くか」

安全装置を確めてから、ピストルをベルトにはさんだ。

「おまえは、どうするか？」

「ジョー……」

寛敏の、一重瞼の細い目から、たちまち涙があふれ出た。リンチの屈辱いらい、報復のことしか頭にないと言っている。だからこそ、琉球連合の包囲の中を、同じ目に遇わされるかもしれぬのに、金城理事長の車を求めて、走り回ってきたのだ。

「連れてってくれ、頼む……」

「分った」

「ありがとう」

寛敏が頭を下げ、ジョーのスーツを突っこんだ紙袋を、大事そうにかかえた。

彼はこないだまで、フラッシュのついたボラロイドカメラを持ち、クラブやバーを回っていた。細い体で、どこかオドオドしているところが安心なのか、アメリカ兵も本土からの観光客も、ホ

ステスを抱き寄せるなどポーズをとる。なかには即製の写真の、出来が悪いとか、値段が高いとかいって、カネを払わないのが居る。すると寛敏は、すぐに組のほうへ電話してくるから、人数を集めて店へ派遣し、GIとて容赦はしない。商いとしては、うまくいくのだが、どうしても寛敏自身は、組の中で軽んじられる。

「おまえ、チャカは？」

「持っておるさ」

急いで紙袋をベッドに置くと、チェック模様のジャンパーの、ファスナーを下げた。寛敏はこの七月に、強盗事件で自首していった下地勝光から、45口径コルトを譲り受けて、月賦払いの状態で差入れを続けているのだ。

「よし！」

頷いて、ジョーはもういちど、鏡の中の自分に、笑いかけた。半年ほど前に、思いついて髭を生やしてみたのがよく、それから、自分の顔に愛着をもつことができるようになったのだ。以前はずっと、二分の一混じっている、フィリッピン人の血を、憎悪の対象にしていたのだが。

「急ごう……」

ジョーは、上着のボタンを、二つともとめた。途中どんなことで、警官に呼びとめられるかわからない。寛敏もまた、ジャンパーのファスナーを、胸元まで引き上げている。

クリーム色の、マツダ・サバンナは、コザ市役所の西の、崖すれすれのところに、停めてあった。このあたりの高台は、昔から馬場になっていて、戦前は軍馬の調教場で、馬上部隊と呼ばれていた。そして戦後は、接収されて補給部隊が駐屯していたのだが、五年ほど前に部隊が移動したため地主に返され、通称“開放地”なのだ。

寛敏が車の向きを変えているあいだ、ジョーは崖の縁から、小便をした。急傾斜には、銀ネムが繁殖しており、暗がりではいちいち確められないが、あちこちに亀甲墓がある。もし母親が見ていたら、墓に向って立小便などんでもないと、目をむくことだろう。そういうえば沖繩戦で、母親の一家が命びろいしたのは、亀の甲に似た形でならかな曲線の、中は小さくても四畳半はあるこの墓に、じつとひそんでいたからだった。

ジョーは雫を切るために、指先にはさんだペニスを振りながら、南端の村に居る母親を思った。せめて十万円は、送ってやりたかった。しかし昼間は、琉球連合の目が光っており、郵便局へも行けない。夜ふけに村まで車を飛ばす方法もあるが、それとて最近では危険なのだ。

もし襲撃に失敗して、逆に殺されたら――。

ちらつと不安が過った。だが、そうなったら場所はキャバレーだし、連中は懷をさぐるような、みつともないことはしないだろう。所持品は、ひとまず警察が押収して、遺族に還付するのが、常識である。そう思ったら、だいぶ氣が楽になった。

「ジョー」

ささやくように、寛敏が呼んだ。夕方まで降っていた雨はやんでいるが、マツダ・サバンナは濡れている。那覇市から、浦添市と普天間市を通過してコザ市へ来るまでのあいだ、にわか雨に遇ったのだろうか。

ジョーは、百六十八センチで、六十三キロの体を、素早くすべりこませた。すると寛敏は、まだドアを閉じ切っていないのに、スタートさせた。

「なるほど、出足がいい」

感心したら、ハンドルを握ってようやく落着いた寛敏が、こちらを向いて初めて笑顔を見せた。「クラウンとは、だいぶちがうさ」

こないだまで乗っていたのは、黒いトヨベツト・クラウンで、リンチのときは、車ごと拉致さ

れている。

島袋一家は、八月末の理事会で、琉球連合から一方的に破門された。組長とその弟は、ただちに行方をくらしましたが、琉球連合は行動隊を編成して、島袋一家の者を追い回した。那覇で捕えた八人を、リンチで痛めつけたのも、組長らの行方を追及するためだった。

あのときは、逃げ切ることでできた者が、一〇番通報して機動隊が出動し、車も取り返せたものの、車種はもちろん、ナンバーも憶えられている。だから寛敏は、一週間ほど前に村の実家へ帰る途中に、ふたたび捕えられそうになった。

「取り換えてよかったな」

「クラウンは、最高百六十。サバンナは、百九十だからよ」

「そうか」

「やっぱりロータリーエンジンはいいさ」

車はコサ署の前を通りすぎ、そのまま行けば嘉手納空軍基地の第二ゲートなので、左折して南へ向った。

ジョーはふと、クラウンとの交換に应じてくれたという、スナック経営者のことが気になった。値段でいえば、クラウンが百万円高い。無条件の交換とあって、飛びついたのは当然だが、街を走っていて琉球連合の行動隊に見つかったら、どうなるか。なにしろ琉球連合は、準構成員をふくめると、千三百人にもなる大組織なのだ。

三年前に、沖縄中のヤクザが大同団結し、琉球連合を結成した。これは本土復帰に、備えたのである。アメリカ軍政下にあつては、きびしい渡航制限がおこなわれていた。左翼陣営の者は、なかなか沖縄へ入れない。同様に、暴力団関係者もまた、査証が取れなかった。東南アジアへの麻薬がらみの窓口であり、なによりも基地があつて武器の宝庫でもある沖縄に、本土の暴力団は早くから進出の機会をうかがっていたものの、渡航制限にはばまれていたのだ。

しかし施政権が返還されれば、渡航は自由になる。抗争をくりかえしながら、那覇派とコザ派の二大勢力が出来上がっていた沖縄の暴力団は、復帰後の本土勢の進出に備えて大同団結したのだった。

寄り合い世帯の、千三百人もの組織だから、横の連絡が充分でない。末端では互いに顔を知らないため、小さなトラブルが絶えなかったが、内部分裂につながるほどのこともなく、三年間ともかく団結が保てたのである。

復帰から二年目、なぜ旧コザ派の島袋一家が、破門されることになったのか。じつはジョーにも、事情が分らないのだ。

「そうだ、ジョーに言うのを、忘れていた」

アメリカ軍の総司令部を左に見ながら、車は普天間のほうへ走っている。スピードは七十から七十五キロで、ちょっと飛ばし気味ながらも、これくらいでは取締りにひっつかかることもない。

「大阪から、電話があった」

「いつ？」

「ゆうべ遅く、ミッチー姐ねえの店によ」

「おまえミッチー姐の店へ行ったのか」

「行かんさ」

そうだろう、那覇の桜坂にある『ミッチー』は、島袋一家の者がよく出入りしていたから、いま琉球連合の行動隊から見張られて、いちばん危険な場所なのだ。ミッチー姐と組長とは、もう二年前に切れているけれども、一家の者はなにかにつけ、きつぷのいいママを頼りにしてきたのである。

「ゆうべ店に電話してみたら、ミッチー姐が教えてくれたさ」

「そうか」

「二人とも元気にしているから、心配しなくてもいいってよ」

「うん」

「ターコはどんな指名がついて、日掛けの貯金を始めたらしいよ」

「よかったな」

「あのターコでそうなら、ヨータンは、ナンバーワン確実でないか」

「……」

ジョーは、苦笑した。寛敏はこんなときでも、お世辞を忘れない。小学生の頃から、こんなふうなのだ。

疎開——。島袋一家では、まず女たちを、関西へ移した。寛敏がヨータンと呼ぶ陽子は、与那国島の出身で二十二歳、三年前からジョーと暮している。だから組織で顔を知られており、九月十二日だったか、美容院の帰りにゲーム場に寄って、スロットマシンで遊んでいたところを、チンピラたちに囲まれて、腹をなぐられたのだった。

そのときジョーは、宜野湾市のホテルに居た。ばらばらに居ては危いので、かたまることにしたのである。かつてベトナム帰休兵があふれていたホテルは、いまは閑散として、貸部屋の看板を出している。そこへ島袋一家が立てこもったものだから、琉球連合の行動隊が走る車からピストルを射ちこんだりして、たちまち機動隊が装甲車で表をかためた。そんな時期だから、陽子が襲われたと聞いても、身動きがとれない。ジョーは何度か、裏口から脱出して陽子のところへ行こうとして、組の幹部に止められた。

女たちの疎開は、ホテル籠城のときに決めた。素早く行動したので、主だった者は、だいたい移すことができた。その後は飛行場も港も、琉球連合の監視の目が光るようになり、危険なのである。ジョーは陽子と、別れを惜しむ機会さえなかった。

——月を見ておるからね。いいねジョー、午前三時に、いっしょに月を見るって約束してちょ

うだい。

陽子は泣きながら、電話で言った。コザ市の中ノ町でクラブ勤めの陽子は、だいたい三時頃にアパートへ帰っていた。だが大阪へ着いてからは、月を見る時間が變つて、一時と言つて来た。

——分つた、毎日おれも月を見る。

ジョーは、約束した。それは、だいたい守っているつもりである。ただ、月を眺める場所が、宜野湾市のホテルから、コザ市のアパートに變つた。警備の機動隊は、やがて島袋一家の全員を、凶器準備集合罪で逮捕したのだ。ホテルの部屋に、水中銃が一丁あつたほかは、コーラ瓶の山に野球バットくらいだったから、分散留置されて三日目には、釈放になった。

警察が厄介払いをしたかたちになり、ホテルへも戻れない。一家の者は、それぞれ散つて、隠れ家を見つけた。ジョーとしては、やはり外人が多いコザ市のほうが安全に思えて、市役所近くのアパートにしたのだ。

「今夜は、どうかな……」

つぶやいて、ジョーは右の窓から、空を見た。この時刻なら、一九四五年四月一日にアメリカ軍が上陸を開始した、西海岸の真上に、月が出ているはずなのだ。しかし、厚い雲は、切れそうにない。

「見えんか」

「どうかしたか？」

寛敏が大声で問うた。ジョーは思わず涙ぐんでしまっていたので、気づかれないように呼吸を整えてから、答えた。

「おまえは、チャカ使うな。理事長は、おれが殺る^や」

「……」

「表で待っておれ。五分経つて戻らんかったら、捕まつたと思つて、おまえは逃げろ」

「ジョー!？」

「分ったな」

ジョーは、言い渡してから、これは命令なのだと、寛敏の横顔を見つめた。

不満なのは、分っている。この五日間は、危険をおかして、沖縄中を走り回っていたのだ。プロレス興行が、間もなくはじまる。金城理事長は、このようなばあい、巡業先を回って前売りの様子を聞いたり、会場の設営に細かい指示を与えたりしなければ、気がすまない性分なのだ。とても理事長の器ではないと言う者もいるし、だからこそ理事長がつとまるのだと見る者もいる。いずれにしても、狙う側にとって、プロレス興行は、絶好のチャンスだった。

ひそかにジョーが心配していたのは、ランボルギーニ・ウラッコを見つけた寛敏が、功を焦って一人で襲撃することだった。入手したピストルは、まだ、試射さえしていない。そんな寛敏が理事長を襲って、仕止められるかどうか……。

「分ったなら、分ったと返事せんか」

ジョーは、きつい声を出した。

「おまえ、『エデン』に入ったことがあるか？」

「ないよ」

こけた頬が、ピクピクふるえている。『沖縄エデン』は、寛敏がボラロイドカメラを持って出入りするような店とはちがい、高級キャバレーなのである。

「金城理事長の、顔が分るか？」

「……」

「それしろ」

ジョーは、叱りつける言いかたをした。リンチのときは、亀頭の一部を、引きちぎられている。性機能がどうなるかさえも、まだ分っていない。しばらくは、「殺されたも同じだ」と泣いてい